

令和4年度 優秀卒論総評

審査委員長 堀江正之

卒業論文としての形式面及び内容面につき、優秀卒論として表彰するに値するかどうかについて、審査委員会による慎重な審査を行いました。

形式面では、「卒業論文作成の手引き」（日本大学商学部・令和4年度版）に従い作成され、とりわけ引用や図表の記載が適切であったかどうか、脚注や参考文献の処理の仕方に問題がなかったかどうか、十分に推敲したものであったかどうかなどが評価のポイントとなっています。

内容面では、何を明らかにしようとするかといった問題意識が明確であるかどうか、論旨あるいは論理の運びに一貫性があるかどうか、先行研究あるいは文献調査や実態調査などを踏まえて著者なりの分析の跡がうかがえるかどうかといった点が評価のポイントとなっています。

審査に付された論文は、ゼミナールでの学習の総決算として、いずれも多くの時間をかけて作成された力作揃いでした。今回、残念ながら選に漏れた論文も、時間をかけて苦勞して作成された跡がうかがえるものでした。よって審査委員会として佳作として表彰することといたしました。

それぞれ所属するゼミナールの特色を生かしたテーマが選定されており、最近のトレンドを反映したものから、理論的・歴史的な角度からの分析を地道に行うものなど、切り口もさまざまでした。また、ほとんどが経営、金融、流通など、いかにも商学部らしい論文テーマが設定されていましたが、今回は発光生物のメカニズムを扱ったものもあつたり、多様性に富んだ論文が揃っていました。留学生が書いた論文も優秀論文として選定されています。

今回は、優秀論文として選定された9名のうち8名が商業学科に所属する学生でした。結果としてこのような偏りが生じただけで、所属する学科にこだわる意味はありませんが、多様性をより一層進めるためには、留学生も含め、多くの学生に挑戦してもらいたいと思います。

卒論を書き上げるという作業が持つ意味はさまざまかと思います。けれども、おそらく一番大事なことは、自らの問題意識に基づき、一つのことを時間をかけて深く考え、悩んでみるという、学生時代でなければできない経験ではないでしょうか。今回選ばれた論文の著者は、おそらく一度や二度は、投げ出したいと思ったこともあつたと思います。このような苦勞と経験は、意識せざるとも、社会に出て必ず生きてくると思います。ぜひ、一人でも多くの学生が卒論の作成に挑戦してもらいたいと思います。